双葉通信【第 240 回】（被災地を行く№25）“ふくしまの切り捨ては許さない”

2025 年 3 月 11 日　上田　勉

3・11 東日本大震災と福島第一原発事故から 14 年

3 月 11 日、この日は東北の被災地にとっては特別な日です。今年は、2011 年から 14 年が経ちました。

岩手県や宮城県では、ハード面の復興はほぼ終わりました。私は 2013 年 2 月から 3 年 2 カ月間宮城県気仙沼市で、復興支援の仕事でお世話になりました。しかし、内湾の周りや JR 大船渡線の南気仙沼駅周辺は大きく変わりました。その当時は仮設の商店街があって、日用品や食品の店がありました。しかし今は飲食店が多く、商店でも地元の人達が利用する庶民の店が少なくなったと思います。私は、気仙沼市の漁港の防潮堤の計画を担当しました。100 年に 1 度の大津波を予想して、防潮堤の高さは決められました。しかし、三陸鉄道で、久慈駅から盛（さかり）駅まで乗っても、車窓からは防潮堤によって、海が見えなくなってしましました。果たして、これで良かったのか、と反省しています。

福島県は、福島第一原発事故によって、現在も県内避難者 39,468 人・県外避難者 14,536 人が避難生活を余儀なくされています。そして、多くの町村で、住民が帰ってきていません。双葉町は、東京都青ヶ島に次いで、日本で 2 番目に居住人口が少ないです。

14 年が経って、これから帰還する住民は少ないと思います。帰還しない理由は、①避難先で仕事をしたり学校に通っている、②帰っても商店や病院が少なくて生活が不便だ、③公共交通機関が少ないので車が無いと生活ができない、④子どもがいると放射能が心配だ、等々です。

スーパーなどは結構込んでいますが、作業員の人や新住民（震災後福島へ移住してきた人）も多いです。帰還した住民の多くは、年金生活を送る高齢者です。行政も、帰還する住民のためよりも、移住してくる新住民のために、施策の重点を変えています。

避難指示が解除されて、1 年以内に建物を除染するか、解体するのかを決めなければなりません。1 年を越えると、解体費用は住民の負担になります。その結果、多くの建物が解体されました。公共施設や歴史のある民家や価値のある建築物の多くが解体されました。震災前の商店街も、多くの土地が更地になっています。私は、震災遺構の研究もしました。震災遺構は「もの言わぬ語り部」です。震災遺構を現地で見ることが、災害の大きさや防災について、身をもって実感させられます。

福島県の復興は、スタートしたばかりです。新しい商業施設や交流施設が各地で建設されています。生活は確かに便利になっています。しかし、街は震災前と大きく変わってしまいました。帰還しない住民が一時的に故郷へ帰って来ても、街には震災前の面影はありません。復興とは元通りの街になることだと思っていた住民は、戸惑いを感じます。

【双葉郡 8 町村の居住者率】

	住民登録人口（人）	居住者数（人）	居住者率（%）
広野町	4,534	4,140	91
楢葉町	6,401	4,480	70
富岡町	11,288	2,579	23
大熊町	9,917	900	9
双葉町	5,279	180？	3
浪江町	14,574	2,000？	14
川内村	2,219	1,853	84
葛尾村	1,219	460	38

※住民登録人口と居住者数には、新住民も含まれる。

【3・11 祈りのつどい（楢葉町）】（2025 年 3 月 11 日撮影）

【3・11 献花台（富岡町）】（2025 年 3 月 11 日撮影）